

朝鮮半島における「古韓尺遺跡」*

新 井 宏**

“Kokanshaku ruins” in Korean Peninsula

Hiroshi ARAI

Keywords: Kokanshaku, Korean old scale, Ruin

1. はじめに

古韓尺とは、筆者が4世紀から8世紀の朝鮮半島ならびに日本を対象に、古墳形状や宮殿・寺院の建物柱間間隔や配置関係について、膨大な計測データを収集し、コンピュータの定量的な解析によって、その中から「最も良く合う尺度」として選び出して提案した尺度である。

いわば帰納的な方法によって導出された尺度であり、それまでの定説、すなわち高麗尺説を覆して、簡単に市民権を得たわけではない。

しかし、その存在を1990年に初めて紹介してから、間もなく20年になる。

その間、古韓尺に関して、文献史料による検証、土地制度との関係解析、東アジア計量史上の位置付けなど、多面的な研究を続けると共に、新たな遺跡資料などの収集につとめ、関連して発表した論文も既に15件^{1)~15)}、著書も2冊¹⁶⁾¹⁷⁾を出版している。したがって、現在では、学説としては、一応の認知を得たものと考えている。

そうは言っても、古韓尺の導出過程から見ても、未だ研究途上の学説であることは否めず、更なる発展のためには、新たな発掘事例などの調査解析に待たねばならない。すなわち、新たな遺跡資料が得られる度に、再評価しながら学説として育成して行く必要があるのである。

しかも、周知のように、遺跡資料によって使用尺度を議論する場合には、「一つの遺跡に一つの尺度」と揶揄されるほど、多様な提案が生じ

易い。時には、古韓尺説を否定するような新提案が生まれるかも知れない。

その場合に重要なことは、関連するデータを総合的に参照して判断することであり、そのために、関連する遺跡の総括的なデータベースを常に参照できるように整備して置くことが望ましい。それは、古韓尺説を補強するためだけでなく、古韓尺説に批判的な研究者にも利便を与えることでもある。

特に、筆者の経験から言って、日本国内の資料の参照は、ある程度容易であるが、朝鮮半島の資料を調査するには、かなりの時間を要する。そのため、本報告では、主として朝鮮半島の遺跡資料について集録して紹介する。

ただし、遺跡の計測資料は、玉石混交であり、ある程度の選択は不可避である。また、雑多で膨大な計測値データを、そのまま示しても、かえって利用し難い面もある。

そのため、原則とし、一定の品質を維持している遺跡のみを対象とし、当初の研究結果すなわち『まぼろしの古代尺』¹⁶⁾に記載した遺跡については、省略ないしは簡略化し、その後の研究で新たに整備した資料を中心として紹介する。

遺跡項目毎に、新規、増補の種別を付記するが、朝鮮半島の品質の良い遺跡については、全て網羅したつもりである。

新たに収集された資料が如何に多いかに注目して頂きたい。

* 受付 2009年

** 〒229-1122 相模原市横山 2-14-6 arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp

2. 高句麗遺跡

[高句麗 1] 方壇階梯積石墓 (増補)

高句麗の積石塚は時代により形が変わり、積石墓、方壇積石墓、方壇階梯積石墓などと分類されている。もっとも古い積石塚の中には、高句麗建国以前と考えられるものもある。

方壇積石塚は下が四角形となっているもので3世紀に入ってから発達したと考えられ、4世紀になると積石が段状になる方壇階梯式積石塚へと発展する。

方壇階梯式積石塚の形式を持つ古墳としては、鴨緑江中流の中国吉林省集安に見られる大王陵、將軍塚など9基が知られていて、いずれも王陵クラスである。

これらの方壇階梯式積石塚については、昭和13年から15年にかけて、池内宏らにより調査され、その測量図が『通溝・卷上』に記載され、国書刊行会の復刻版¹⁸⁾で見ることができる。

その内で、尺度を議論できるような古墳は、將軍塚、大王陵、兄塚、弟塚、折天井などであ

表1 高句麗石積墓辺長の古韓尺対応表

古墳名	部位	辺長 m	古韓尺		
			尺	歩	cm
將軍塚	基壇	32.5	120	20	27.1
	1壇	29.6	110		26.9
	2壇	26.7	100		26.7
	3壇	24.1	90		26.8
	4壇	21.5	80		26.9
	5壇	18.9	70		27.0
	6壇	16.1	60		26.8
	7壇	13.4	50		26.8
	上壇	8.0	30		26.7
	石室	5.3	20		26.5
太王陵	基壇	65.0	240	40	27.1
	1壇	56.0	110		26.9
兄塚	基壇	22.6	84	14	26.9
	1壇	19.2	72	12	26.6
	2壇	16.4	60	10	27.3
	3壇	13.5	50		27.0
弟塚	基壇	18.8	70		26.8
	1壇	15.8	60	10	26.4
	2壇	13.4	50		26.8
	3壇	10.8	40		27.0
折天井	基壇	21.2	80		26.5
	1壇	18.5	70		26.5
	石室	4.0	15		26.7

り、それらの平面図を図1にまとめて示す。

これらの平面図から、各古墳の各段の辺長を図測して、それらの辺長が古韓尺とどのように対応しているかを整理した表を表1に示す。尺度適応の際に採用した古韓尺の尺数は「切りのいい数字」を原則としている。なお、將軍塚と大王陵については、陵域も知られているので、底辺長と共に整理して、表2に示すが、古韓尺によって、ほぼ例外なく良好な対応関係が得られている。これら高句麗石積墓は、古韓尺導出当初の検討には含まれていなかったもので、そ

表2 高句麗石積墓底辺・陵域の古韓尺対応表

部位	辺長 m	古韓尺		
		尺	歩	cm
將軍塚	32.5	120	20	27.1
將軍塚陵域	96		60	26.7
太王陵	65	240	40	27.1
太王陵陵域	320*		200	26.7
千秋塚	80?		50	26.7
西大塚	55		35	26.2
兄塚	22.6	84	14	26.9
弟塚	18.8	70		26.9
折天井塚	21.2	80		26.5

*白石太一郎「巨大古墳の造営」『古代を考える・古墳』吉川弘文館、1989の紹介

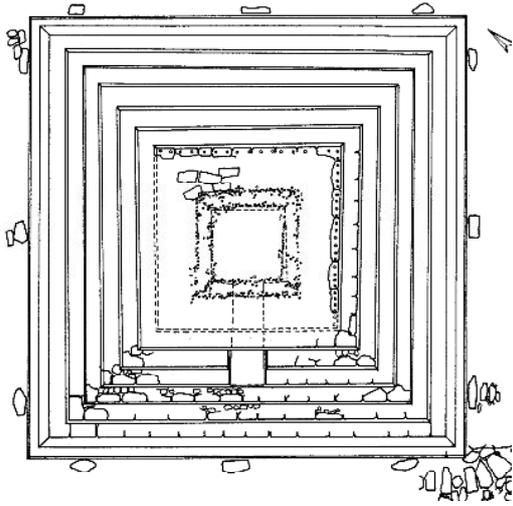
の後の研究によって新たに古韓尺を検証する有力な資料となったものである。

[高句麗 2] 東明王陵 (新規)

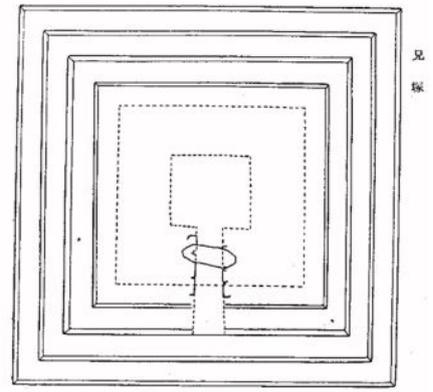
平壤市の東南にある東明王陵は石室封土墓であり、金日成総合大学により調査されて『五世紀の高句麗文化』¹⁹⁾にその実測図が紹介されている。原図にはサイズは記載されていないが、添付尺に基づき、主要な部分について長さを計算して、付記して図2に示す。また、その結果に基づき、古韓尺の適合状態を表3に示す。

表3 東明王陵の平面図

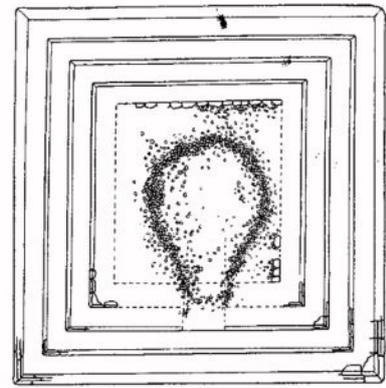
部位	辺長 m	古韓尺	
		尺	cm
外面底辺	32.0	120	26.7
墳丘辺	21.5	80	26.8
前方礎石巾	10.7	40	26.7
前方礎石間	8.0	30	26.7
玄室	4.2	16	26.3



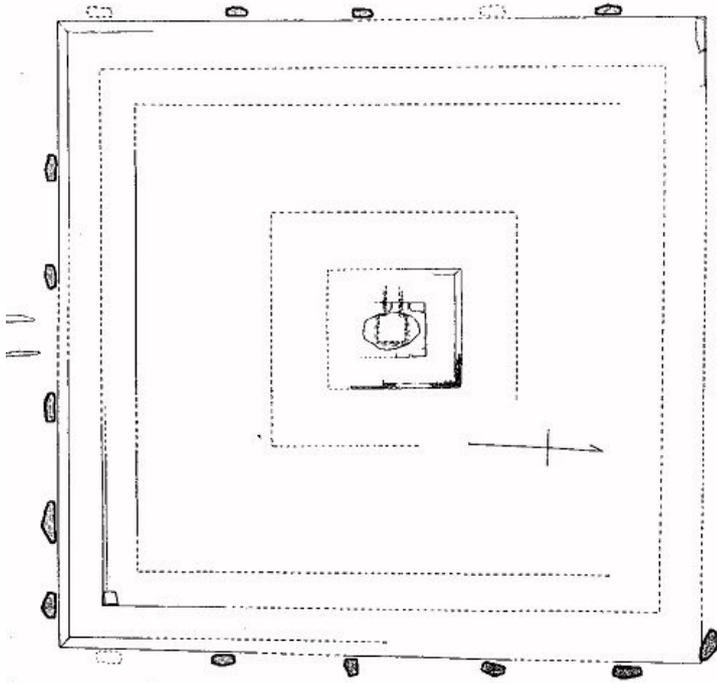
將軍塚 (底辺 32.5m)



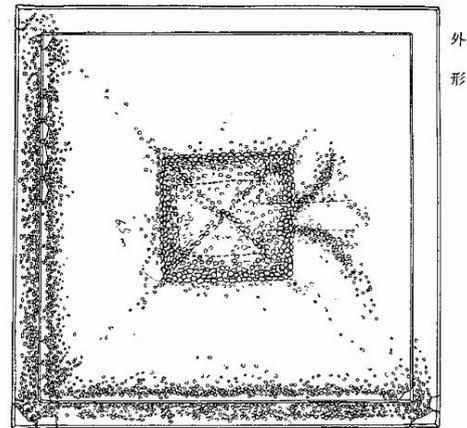
兄塚 (底辺 22.6m)



弟塚 (底辺 18.8m)



太王陵 (底辺 65m)



折天井 (底辺 21.2m)

図1 高句麗方壇階段式石積墓の平面図(復刻版『通溝』上巻、国書刊行会、1973)より

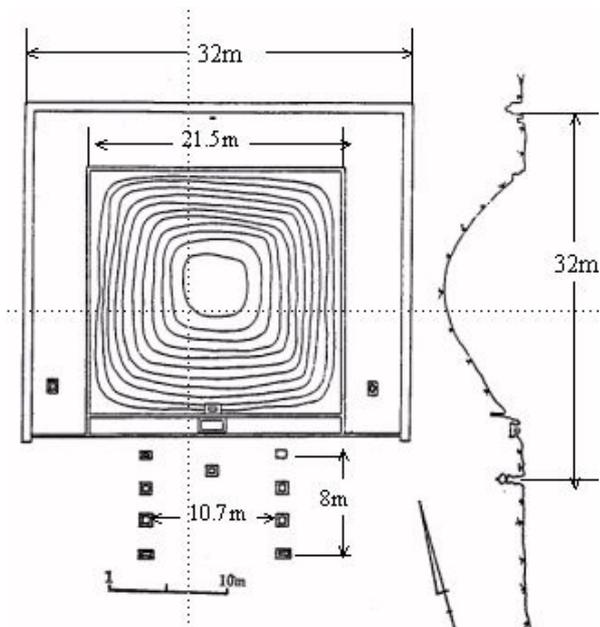


図2 東明王陵の外形実測図

これらの検証資料も当初の古韓尺導出に用いたものではなく、その後の検討で新しく見出したものである。

[高句麗 3] 石村洞積石古墳 (新規)

ソウル市の漢江南岸にある石村洞古墳群は、典型的な積石古墳であり、高句麗古墳の影響を受けているばかりでなく、時代的にも高句麗の將軍塚などよりもむしろ古く4世紀頃と考えられている。1988年のオリンピックに先立ち、調査が行われ、そのいくつかは公園内に復元されている。百濟の古墳ではあるが、高句麗式なので、この項に掲載する。

表4 石村洞積石古墳群の古韓尺対応表

古墳名	部位	辺長		古韓尺	
		m	m	尺	cm
2号墳	1壇	東西	17.4	65	26.8
		南北	16.2	60	27.0
	2壇	東西	13.4	50	26.8
		南北	12.2	45	27.1
	3壇	東西	9.4	35	26.9
		南北	8.2	30	27.3
	4壇	東西	5.4	20	27.0
		南北	4.2	16	26.3
4号墳	基壇	辺長	24.0	90	26.7
	1壇	〃	17.3	65	26.6
	2壇	〃	13.3	50	26.6
	3壇	〃	9.4	35	26.9
	墓槨	〃	4.8	18	26.7

その中で、尺度を論じることのできるのは、2号墳と4号墳である。2号墳については、金元龍ほか『石村洞1・2号墳』ソウル大学校考古人類学叢刊第14冊²⁰⁾、4号墳についてはソウル大学校博物館『石村洞積石塚発掘調査報告』²¹⁾に基づいて、辺長などを拾い、古韓尺との対応関係を整理すると表4のようになる。なお、2号墳については図3に復元図を、4号墳については図4に発掘調査図を示す。これらも古韓尺導出当初は検討対象となっていなかったものである。

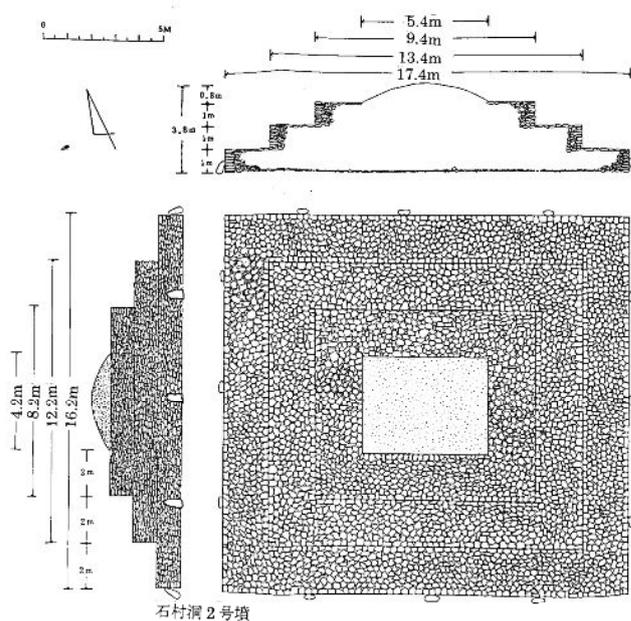


図3 石村洞石積2号墳復元図

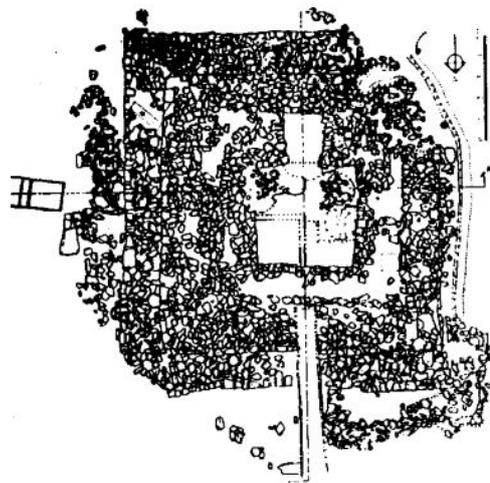


図4 石村洞石積4号墳発掘調査図

[高句麗 4] 安鶴宮 (増補)

安鶴宮は平壤の大城山の南麓にある位置する高句麗の遺跡であり、427年(長寿王15年)から567年(平原王9年)までの間、高句麗全盛期の首都の王宮であった。石と土を混ぜて積み上げられた平行四辺形状の城壁は総延長約2.4kmで、その中に、南宮、中宮、北宮、西宮、東宮があり、各宮殿は回廊で区切られていた。図5の配置略図を示す。

数次にわたり発掘調査が行われており、その概要が1973年の金日成総合大学『大城山の高句麗遺跡』²²⁾に報告されており、その抄訳が水谷昌義により「安鶴宮址発掘調査報告」²³⁾として紹介されている。

建物址には、礎石はあまり残っていないが、礎石下の基礎施設の配置が明らかにされている。しかし、基礎施設の直径が2~3m前後もあり、個々の建物の柱間隔を正確に知ることはできない。

ただし、幸いなことに回廊などに関しては、総長が100m前後あり、しかも柱間隔が同一と見なせる場合が多いので、その平均値を採用すると、正確な柱間隔を知ることができる。また一部の宮殿についても、等間隔の柱間が見られ、

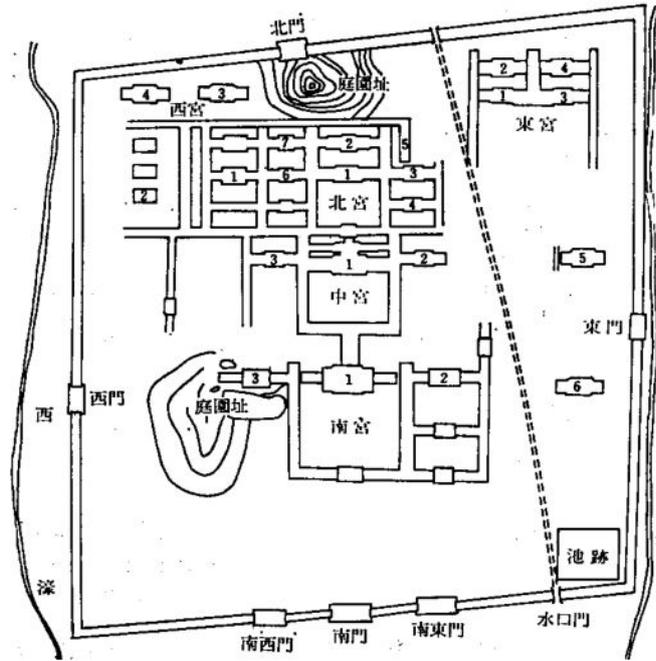


図5 高句麗安鶴宮の配置図²³⁾

その平均値を知ることができる。

報告書に記載された回廊長と配置図の関係から、各回廊の柱間を計算して、表5に示す。表中*印のついているものが計算値である。その他、報告書には回廊の桁行、梁行について柱間を直接示している場合もあるので併記する。これらは、計測値としての精度が多少劣るが、その多くが4.25mとか4.0mと示されているので、個々の測定値というよりは、遺跡全体を通しての調査者の認識を示していると思われる。それぞれが古韓尺の16尺と15尺に対応している。表5には、古韓尺に尺数と古韓尺の計算値を示す。

当初の古韓尺導出研究では、安鶴宮の配置状況(建物間の相対位置関係)も重要な資料として取り上げているが¹⁶⁾、そこで得られた古韓尺の尺長は26.7cmであり、回廊桁行や梁行の解析結果と良く一致している。

表5 高句麗安鶴宮の回廊桁行などの古韓尺適合

宮殿名称	回廊	全長 m	列	桁行 m	古韓尺		梁行 m
					尺	cm	
南宮 一号宮	東西複回廊	110.7	26	4.26 *	16	26.7	4.25
	前複回廊	128.8	30	4.29 *	16	26.9	4.25
	二宮	東単回廊	161.0		4.25	16	26.6
中宮 一号宮	東西単回廊	98.3	23	4.27 *	16	26.7	4
	前面複回廊	103.5					4.25
	二宮	北単回廊	55.5	14	3.97 *	15	26.5
北宮 一・二号宮	東西複回廊	55.0	13	4.23	16	26.5	4
	二宮	東西単回廊	45.5				4.25
	三・四・五号宮	東単回廊	70.0				4.25
	六・七号宮	西複回廊	100.8	24	4.20	16	26.3
西宮 二号宮	南回廊	93.0	25	3.72 *	14	26.6	4
	二宮	宮殿	21.3	5	4.25	16	26.6

*印は計算結果。印なしは報告書記載の数値。

3. 新羅遺跡

【新羅1】二聖山城（新規）

漢江南側、ソウル市東隣の河南市にある二聖山城は、標高 209mの低い山に築いた包谷式山城で、外周 1.6kmを石垣による城壁で囲んでいる。この遺跡は、戦前から日本の考古学者らによって、漢城百済の遺跡との説が唱えられてきたが、発掘調査の結果では百済の遺物はほとんど見付からず、新羅が6世紀に高句麗と百済から漢江流域を勝ち取った後に築城し、統一新羅時代まで通して使用していたようである。

遺跡の中で注目すべきは、ふたつの長方形建物である。図6²⁴⁾に示すが、いずれも桁行が15間以上あり、柱間が等間隔なので、精度のよい計測値が得られる。梁行も4間あり、計測値の品質も悪くない。用途は倉庫と想定される。

報告書をもとにして、各々の桁行と梁行を算出すると、次の通りであり、古韓尺の8尺と7.5尺に合致している。

E地区長方形型建物

桁行：2.135m（8.0尺） 尺長 26.7cm

梁行：1.970m（7.5尺） 尺長 26.3cm

C地区長方形型建物

桁行：2.130m（8.0尺） 尺長 26.6cm

梁行：2.000m（7.5尺） 尺長 26.7cm

これらの資料も古韓尺導出初期の検討対象には含まれていなかったものである。

【新羅2】慶州皇龍寺（増補）

皇龍寺は、553年に創建が始まり、574年に金銅三尊丈六仏が造られ、584年にそれをまつための金堂が建立され、645年に善徳女王が、百済の阿非知を招いて木造九重塔を建立したと伝えられている。伽藍が完成するまで93年間を要した、東洋最大規模の大寺院であった。高麗時代に蒙古の侵入によって焼失して以来今日まで再建されることなく、かつての寺址だけが残っている。

1983年に、国を挙げて行われた発掘調査の結果が『皇龍寺遺蹟発掘調査報告書I』²⁵⁾として刊行された。伽藍配置は中門・塔・金堂・講堂が南北に配置された一塔式伽藍配置を基本とし、塔の前方に左右対称に鐘楼と経蔵を配置していた。

超大型建造物が整然と配置されており、しかもその礎石位置などが、極めて精密に測定されているので、尺度問題を考察するに当たっては、現存する奈良の法隆寺にも劣らぬほどの品質良好な資料を提供してくれている。

古韓尺の検証事例としては、皇龍寺と法隆寺のみでも十分なほど品質良好な資料が得られており、逆に言

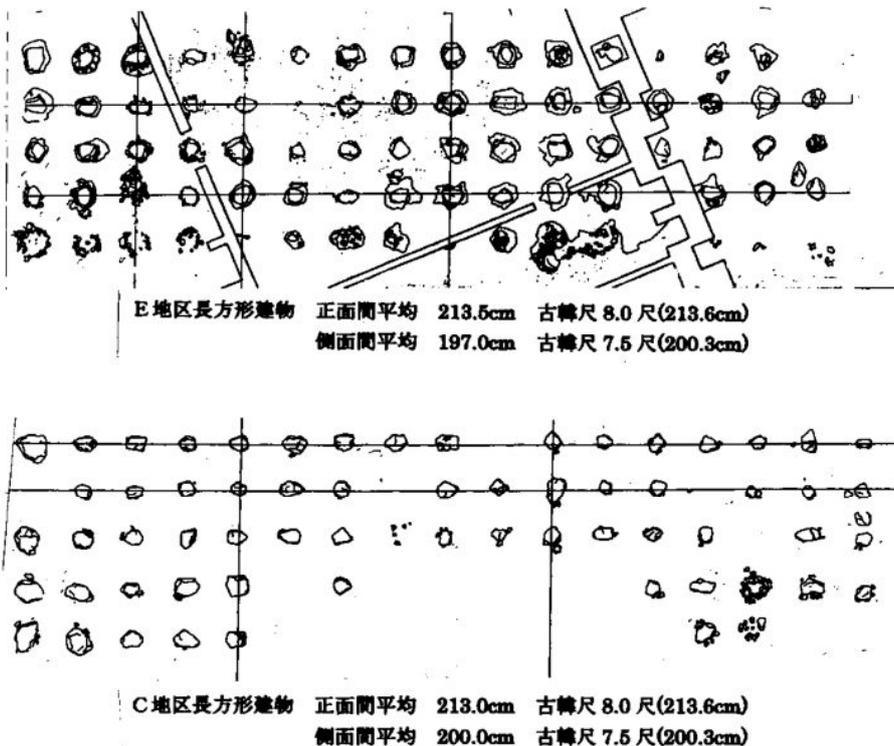


図6 新羅の二聖山城の長方形建物（E地区、C地区）²⁴⁾

えば、他の如何なる尺度によっても、これらの資料を合理的に説明することは、極めて困難である。

当初の古韓尺導出研究においても、計測値の品質に優れる塔、金堂、講堂については詳細に取り上げたので、以下には簡単に紹介するに留めるが、今回は多少計測値の品質が劣る東西金堂や講堂西側の建物、中門を含め、回廊桁行についても追記する。表中のnは、対象の柱間の長さを算出するのに用いた柱間の数であり、nが大きいほど計測値の精度が高いことを意味している。なお、一部の回廊に関しては、創建当初のものでなく、後世の改築による可能性もあるが、恣意的な取扱いを避けるため、同一の基準で示す。

全体的に見て、古韓尺に良く適合していることを再確認できると考える。

【新羅3】慶州芬皇寺（新規）

『三国史記』によれば、慶州にある芬皇寺は634年(仁平元)に完成した。磚塔を中心として、後方に中金堂と東西金堂を配置する一塔三金堂方式の伽藍であり、磚塔も7世紀の建立で、下部には創建当時の遺構が残っている。中金堂は、26.6m×15.4m、東西金堂は20.3m×18.0mの規模とわかっているが、柱間の詳細は不明である。皇龍寺と共に、新羅慶州を代表する寺院であり、磚塔の平面図(図7)²⁶⁾をもとにして古韓尺を対応させて見ると次の通りである。採寸は図測による。

基壇長： 13.2m 50尺 26.4cm

塔底辺： 6.6m 25尺 26.4cm

古韓尺としてはやや短めであるが、皇龍寺の木塔、金堂の値と完全に一致している。

表6 新羅慶州皇龍寺の建物の古韓尺適合

建物	項目	実測値 cm	n	古韓尺	
				尺	cm
木塔 講堂	桁行・梁行	316.7	108	12.0	26.4
	桁行	546.3	42	20.5	26.7
	梁行	396.8	39	15.0	26.5
金堂	内陣桁行・梁行	500.3	68	19.0	26.4
	外屋AB梁行推定	342.5	6	13.0	26.4
東金堂	桁行(中央5間)	464.5	5	17.5	26.6
	桁行・梁行中端間	400.9	4	15.0	26.8
西金堂	桁行(中央3間)	454.8	4	17.0	26.8
	桁行端2間	419.8	9	16.0	26.3
	梁行中央(内側)	709.0	4	27.0	26.3
講堂西側①	梁行端間(外側)	402.4	8	15.0	26.9
	桁行	424.3	10	16.0	26.6
	外屋梁行(外側)	266.7	6	10.0	26.7
講堂西側②	内陣梁行(内側)	526.0	3	20.0	26.4
	桁行	474.3	16	18.0	26.4
講堂西側③	外屋梁行	264.7	7	10.0	26.5
	内陣BD梁行推定	656.0	4	25.0	26.3
	桁行	490.1	8	18.5	26.5
中門	外屋梁行(外側)	265.4	6	10.0	26.6
	内陣梁行(内側)	524.4	3	20.0	26.3
	桁行	469.9	5	17.5	26.9
南廻廊(東)	梁行	212.4	8	8.0	26.6
	桁行	411.9	46	15.5	26.6
南廻廊(西)	梁行	455.5	48	17.0	26.8
	桁行	356.5	57	13.5	26.5
東廻廊	梁行	413.2	89	15.5	26.7

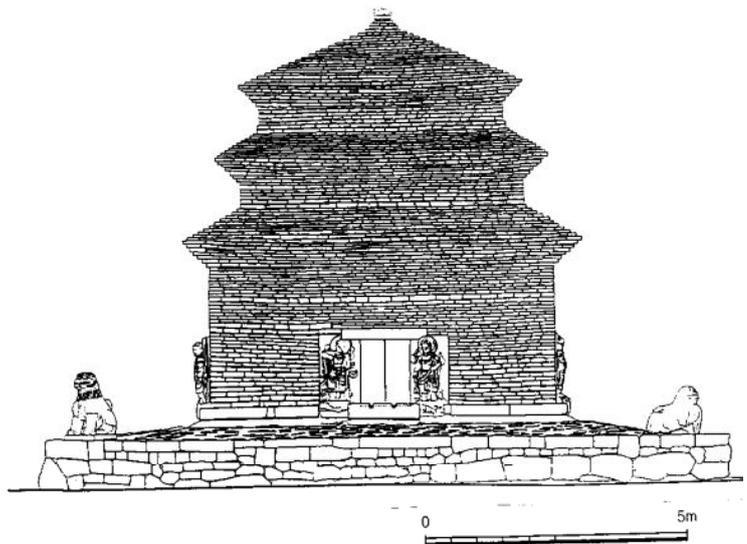


図7 芬皇寺磚塔の立面図²⁶⁾

[新羅4] 鷄林北便建物（新規）

慶州の瞻星台から月城鷄林への途中に規則正しく配置された大型建物群址が見付かった。新羅時代の官庁の建物と想定されている。『月城垓字発掘調査報告書Ⅰ』²⁷⁾によると、その配置は図7のようになっており、建物1～建物8および建物10が統一された計画により造営されたものと考えられている。

報告書に記載された柱間距離を整理すると、表7のようになる。すなわち、建物2,3,4,6,7,8が同一の設計で、桁行が2.7m、梁行が2.65mとなっており、いずれも古韓尺の10尺に対応する。また、建物5,10も同一の設計であり、桁行が3.5mで古韓尺の13尺に対応している。

古韓尺の10尺は唐尺の9尺とほぼ同じ長さであり、建築された時期によっては唐尺による建物の可能性もあるが、数値の信頼性が高い桁行の場合、2.7mと3.5mが共に完数尺となるのは古韓尺であり、唐尺では、3.5mが12尺に対応させるには短すぎる。

なお、報告書に添付された測量図に基づき、筆者が2群の桁行を再計算した結果は、報告書の値よりも短く、次のようになっている。

- 建物2,3,4,6,7,8の桁行
2.7m→2.63m（古韓尺長=26.3cm）
- 建物5,10の桁行
3.5m→3.45m（古韓尺長=26.5cm）

なぜ報告書記載の数値が、測量図による計算値と異なるのか不明であるが、測量図による計算値を採用すると、古韓尺では26.3cm、26.5cmと皇龍寺の塔、金堂などの値に一致するが、それぞれが、唐尺では29.2cmおよび28.8cmとなり、いずれも短すぎる。やはり古韓尺の可能性が高いので、ここに収録しておく。

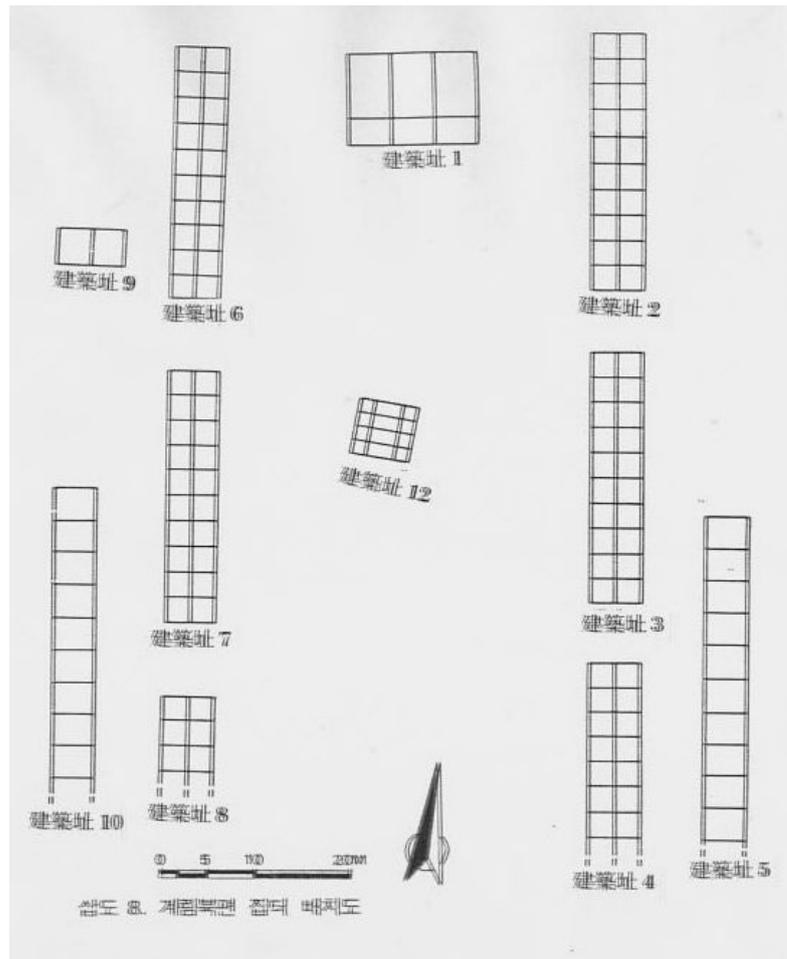


図8 慶州鷄林の官庁建物群配置図²⁷⁾

表7 慶州鷄林の官庁建物群の古韓尺適合

建物名	桁行梁行	柱間 m	古韓尺	
			尺	cm
建物1	桁行（3間）	4.3	16	26.9
建物2, 3, 4	桁行（10間）	2.7	10	27.0
	梁行（2間）	2.65	10	26.5
建物5	桁行（10間）	3.5	13	26.9
	梁行（1間）	4.4	17	26.7
建物6, 7, 8	桁行（10間）	2.7	10	27.0
	梁行（2間）	2.65	10	26.5
建物10	桁行（10間）	3.5	13	26.9
	梁行（1間）	4.4	16.5	26.7

【新羅 5】慶州南山長倉（新規）

新羅王京の南に位置する南山新城の北側に、大きな倉庫跡がある。『朝鮮宝物古蹟図録第二』²⁸⁾にその調査結果が報告されている。その内、東倉と西倉の場合、桁行が17間または16間あり、等間隔部分から精度の良い柱間長さが得られる。図9にその配置図を示す。

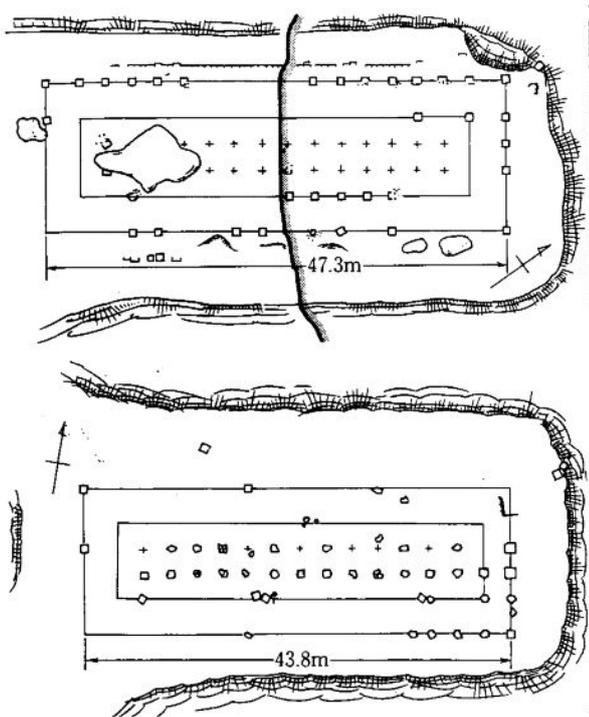


図9 慶州の南山新城にある長倉²⁸⁾

報告書によれば、東倉は17間×5間（47.30m×15.59m）であり、桁行および梁行の両端が平均で3.721mとなっている他は、内部は全て

等間隔である。したがって、柱間の平均値は $(47.3+15.59-3.721\times 4)/18=2.667\text{m}$ である。

したがって、古韓尺によるならば
両端部 3.721m : 14尺（古韓尺 26.6cm）
中央部 2.667m : 10尺（古韓尺 26.7cm）
となる。西倉についてもほぼ同様である。

南山長倉の場合も、前項の鶏林官庁建物の場合と同様に、中央部の柱間平均の2.667mは、唐尺の9尺にも合致するので、古韓尺と簡単に断定することはできないが、その場合には両端の3.721mが唐尺にうまく合致しない。古韓尺と考えて良いと思う。

【新羅その他】城東洞遺跡と雁鴨池

城東洞遺跡と雁鴨池は比較的に大きな宮殿遺跡であり、一部には尺度を論ずることのできる計測値が得られている。例えば、城東洞遺跡の場合、殿廊址として、24間の建物址が見付かっているが、その間隔を等間隔として、図測して計算すると約3mとなる。この遺跡は北宮の可能性が高く、統一新羅期に唐尺の10尺によって作られたものと思われる。

また、雁鴨池遺跡も、7間×4間の大型建物（報告書 FGH-67）の桁行・梁行の平均が3.28mで唐尺の11尺になり、5間×5間の大型建物（FGH-1011）の場合も、桁行を等間隔とすると3.56m、梁行は両端を3.56mとすると中3間は2.95mとなり、それぞれが唐尺の12尺と10尺に一致する。これらも統一新羅期の建物と考え、古韓尺としての検討は行わない。

4. 百濟遺跡

【百濟 1】益山弥勒寺（増補）

百濟で最大で7世紀始め百濟武王の頃に作られたと伝えられる益山の弥勒寺は、三つの寺院をひとつにしたように、門と塔と金堂のセットが3組ある。

古韓尺の導出段階では、発掘報告書として『弥勒寺発掘調査中間略報告』²⁹⁾しか利用できな

ったが、その後、膨大な正式の報告書『弥勒寺発掘調査報告書I』³⁰⁾を入手している。皇龍寺の発掘調査同様に、国を挙げての調査であり、礎石位置などについても詳細を極めているが、皇龍寺に較べると後世の攪乱が大きく、主要な建物の柱間の測定値もやや精度が劣る。

しかし、何と云っても巨大な寺院であり、その計測値が古韓尺によって十分合理的に理解で

きるか否かは古韓尺学説の成否にもかかわる。

創建時の伽藍配置図を図 10 に示す。煩雑さを避けるため、個々には説明を付けないが、皇龍寺と同じ形式に整理して表 8 に示す。古韓尺による適合度がかなり高いことが直ちに分るのであろう。

なお、整然とした伽藍配置は、統一された計画によっていることは疑いなく、主要建物の位置関係についても、次のように簡単に整理しておきたい。

塔址と金堂址中心間：31.60m

20 歩(120 尺) 古韓尺 26.3 cm

講堂と中金堂中心間：71.61m

45 歩(270 尺) 古韓尺 26.5 cm

中金堂～西塔・東塔間：57.65m

36 歩(216 尺) 古韓尺 26.7 cm

東・西僧坊址中心間：118.70m

75 歩(450 尺) 古韓尺 26.4 cm

外廊垣址南・北間：288m

180 歩(1080 尺) 古韓尺 26.7 cm

古韓尺は6尺1歩が基本であるが、量地尺としては、更に古韓尺の3歩を量田歩としていたと言うのが、筆者の主張¹⁾である。上記を見ても、3歩を基本単位としている様子を良く読み取れる。

表 8 百濟益山弥勒寺の建物の古韓尺適合

建物	項目	実測値 cm	n	古韓尺	
				尺	cm
中金堂	外屋	329.5	4	12.5	26.4
	内陣桁行	452.5	4	17.0	26.6
	内陣梁行	375.0	4	14.0	26.8
西金堂	桁行	268.6	12	10.0	26.9
	梁行・外屋桁行	229.7	15	8.5	27.0
講堂	内陣桁行	504.9	20	19.0	26.6
	外屋	306.8	13	11.5	26.7
東院僧坊	南北桁行(D-N)	383.6	20	14.5	26.5
	南北桁行(A-D)	224.8	4	8.5	26.4
	東西柱間	588.4	12	22.0	26.7
東院東廻廊	東西桁行(2-5)	369.5	4	14.0	26.4
	角桁行・梁行	228.7	11	8.5	26.9
中院西廻廊	桁行(図測)	318	9	12.0	26.6
	桁行	333.7	18	12.5	26.7
中院北廻廊	桁行	333.0	2	12.5	26.6

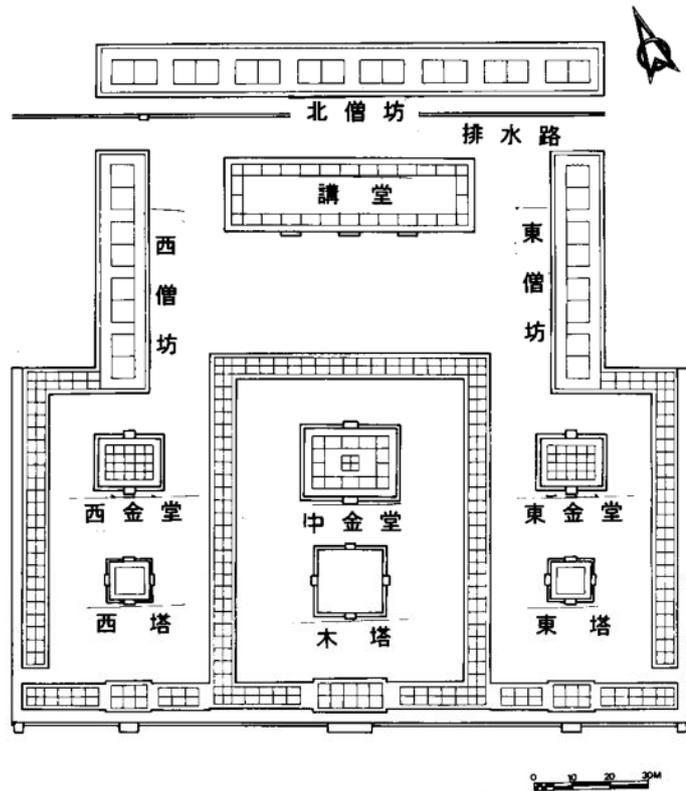


図 10 百濟益山弥勒寺の創建時の伽藍配置

[百濟 2] 益山王宮里寺 (新規)

益山の王宮里にある寺院遺跡は美しい五層石塔を持ち、通称では王宮里寺と言われている。塔の後方に金堂、講堂が配置されていることが発掘調査で判明しているが、柱間などの計測値の品質はあまり良くない。ただし、弥勒寺を除く

くと、百濟の遺跡としては比較的状況が良く判る方なので、取り上げて置く。

まず、金堂は桁行、梁行の両端が 2.5 m、桁行中央3間が 4.77m、梁行中央2間が 3.75mと推定されている³⁾。4.77 mは古韓尺の18尺(古韓尺 26.5 cm)、3.75 mは古韓尺の14尺(古韓尺 26.7 cm)に良く合っている。2.5mは古韓尺の9.5尺(古韓尺 26.3 cm)であろうか。

また、講堂は桁行5間を 2.2-3.4-3.6-3.4-2.2m、梁行4間を 2.1-2.5-2.5-2.1mとしているが、桁行、梁行の端間は同一柱間であろうから、平均で 2.15m

であり、古韓尺の8尺(26.9 cm)になる。桁行中央3間も平均が3.5mで古韓尺13尺(26.9 cm)、梁行2.5mは古韓尺9.5尺(26.3 cm)になる。

品質の劣る計測値なので若干の解釈を加えた結果であるが、古韓尺と見て良いと考える。

なお、金堂址からは南北の地覆石巾が3.51m、東の地覆石巾が2.43mと報告されている。それぞれ古韓尺の13尺(古韓尺27.0 cm)、9尺(27.1 cm)に対応している。

[百濟] 陵山里寺遺跡(新規)

扶餘にある陵山里寺は、中門、金堂、講堂址などが調査されているが、かろうじて尺度を議論できるのは金堂のみである。礎石が残っていないので、配置の概略しか分らないが、平面図は図11のようになっている³²⁾。

これを報告書では、前面桁行で3.05-3.96-3.60-3.55-2.90m、後面桁行で2.70-3.55-3.72-4.00-2.84mとし、東面梁行で2.82-5.72-2.70m、西面梁行で2.44-6.07-2.80mとしている。

もちろん、このままでは尺度を議論できないので、金鍾萬³³⁾は、桁行2.92-3.70(3間)-2.92m、梁行2.92-5.44-2.92mと整理してい

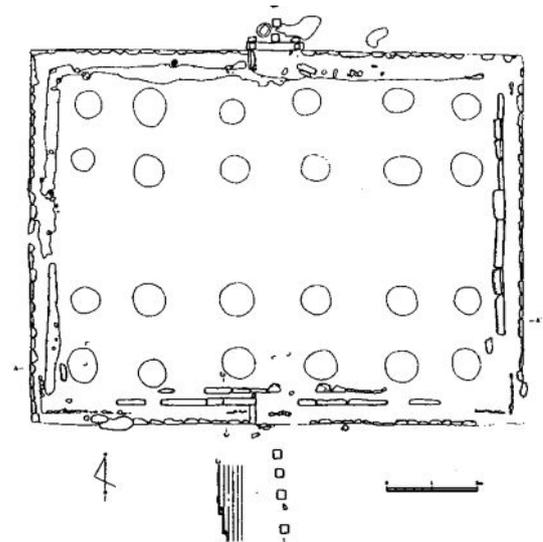


図11 扶餘陵山里寺金堂の配置図

る。これとてもかなり誤差の大きな推定値であろうが、これらの諸元を古韓尺で整理すると次のようになる。

- 2.92m 11尺 (古韓尺26.5 cm)
- 3.70m 14尺 (古韓尺26.4 cm)
- 5.44m 20尺 (古韓尺27.2 cm)

品質の劣る計測値としては、良く一致していると言えよう。

5. 日本の場合

本報告は、朝鮮半島の古韓尺遺跡を収集することを目的としているので、日本の事例については、代表的な法隆寺の場合のみを表8³⁴⁾に示す。

いずれにしても、法隆寺は現存する建物であり、これ以上に品質のよい計測値を望み得ないものであり、しかも、古韓尺よりも良く合う尺度を検出することはおそらく不可能なものである。したがって、この資料一件だけで、日本における古韓尺の存在を立証し得るものと考え、例示に留める。

表9 奈良法隆寺の建物の古韓尺適合

建物	項目	実測値 cm	n	古韓尺	
				尺	cm
金堂	初重側柱狭間	216.4	48	8.0	27.1
	初重側柱広間	323.2	60	12.0	26.9
	初重内陣廻り	323.5	60	12.0	27.0
	初重外陣柱間	216.0	48	8.0	27.0
	上重両端の間	188.6	48	7.0	26.9
	上重側面中間	296.9	12	11.0	27.0
	上重中央中間	309.0	24	11.5	26.9
	五重塔	初重中央間	266.7	20	10.0
初重端間		187.7		7.0	26.8
二重中央		241.9		9.0	26.9
二重端間		162.5		6.0	27.1
三重中央		214.8		8.0	26.9
三重端間		134.50		5.0	26.9
四重中央		187.9		7.0	26.8
四重端間		106.9		4.0	26.7
回廊	五重	161.7		6.0	27.0
	桁行・梁行	375.0		14.0	26.8

6. おわりに

本研究ノートは、筆者の今までの「古韓尺研究」を朝鮮半島の遺跡資料からレビューしたものである。

もちろん、主な目的は、古韓尺の適合度合を総合的に紹介することにあるが、他方では、古韓尺について批判的な立場にある研究者にも、収集し難い基礎資料を提供することを目的としている。

本来であれば、古韓尺の導出過程についても、触れるべきであったであろうが、記述を省略ないしは簡略に留めたのはそのためである。

文献

- 1) 新井宏：古代尺度復元法の研究－（第1報）よみがえる古韓尺と高麗尺への疑問、計量史研究、13、(1990)、1～135頁
- 2) 新井宏：古代尺度復元法の研究－（第2報）文献史料等による古韓尺の実証、計量史研究、14、(1991)、1～26頁
- 3) 新井宏：古代尺度復元法の研究－（第3報）、計量史研究、15、(1992)、1～10頁
- 4) 新井宏：朝鮮の尺度変遷について、計量史研究、14-1、(1992)、11～35頁
- 5) 新井宏：量田制における頃と結、朝鮮学報、144、(1992)、1～28頁
- 6) 新井宏：朝鮮の尺度変遷について、朝鮮史研究会論文集、30、(1992)、149～174頁
- 7) 新井宏：『考工記』の尺度について、計量史研究、19-1、(1997)、1～15頁
- 8) 新井宏：古韓尺で作られた法隆寺(韓文)、日本学報、8、慶尚大學校日本文化研究所、(2002)、53～79頁
- 9) 新井宏：《三国史記・遺事》記事による新羅王京復元と古韓尺(韓文)、百濟研究、36、(2002.8)、117～137頁
- 10) 新井宏：出雲風土記の里程に現れた古韓尺(韓文)、百濟研究、37、(2003.2)、103～125頁
- 11) 新井宏：結負制の復元と代制の起源(韓文)、韓国古代史研究、30、(2003.6)、143～172頁
- 12) 新井宏：古墳築造企画と代制・結負制の基準尺度、考古学雑誌、88-3、(2004)、16～40頁
- 13) 新井宏：古代日韓の土地制度における基本尺度、計量史研究、26-2、(2004)、141～151頁
- 14) 新井宏：日韓古代遺跡における高麗尺検出事例に対する批判的検討、朝鮮学報、195、(2005)、1～38頁
- 15) 新井宏：古代東アジアにおける土地計量制度の変遷、計量史研究、28-1、(2006)、1～8頁
- 16) 新井宏：まぼろしの古代尺－高麗尺はなかった、吉川弘文館、(1992)、1～231頁
- 17) 新井宏：理系の視点からみた考古学の論争点、大和書房、(2007)、1～283頁
- 18) 池内宏ほか、復刻版『通溝』上巻、国書刊行会、(1973)、49～61頁、図17、図21、図26、図27
- 19) 金日成総合大学『五世紀の高句麗文化』雄山閣、(1985)、6～19頁
- 20) 金元龍ほか：石村洞1・2号墳(韓文)、ソウル大學校考古人類学叢刊第14冊、(1989)、16～24頁
- 21) ソウル大學校博物館：石村洞積石塚発掘調査報告(韓文)、(1975)、図10
- 22) 金日成総合大学：大城山の高句麗遺跡(韓文)、(1973)、108～209頁
- 23) 水谷昌義訳：安鶴宮址発掘調査報告、朝鮮学報、109、(1983)、1～27頁
- 24) 金秉模、沈光注：二聖山城（三次発掘調査報告書）(韓文)、漢陽大學校、(1991)、240～244頁、375～384頁
- 25) 金正基ほか：皇龍寺遺蹟発掘調査報告書I

- (韓文)、慶州古蹟発掘団、(1983)、48～115
頁
- 26) 芬皇寺発掘調査報告書 I (韓文)、国立慶州
文化財研究所、(2005)、72 頁
- 27) 南時鎮 : 月城塚字発掘調査報告書 I 、
文化財研究所慶州古蹟発掘調査団、(1990) 、
72～90 頁
- 28) 南山城と長倉、朝鮮宝物古蹟図録第二、朝
鮮総督府、(1940)、10～13 頁
- 29) 弥勒寺発掘調査中間略報告(韓文)、文化財
管理局文化財研究所、(1980)、8～29 頁
- 30) 弥勒寺遺跡発掘調査報告書 I (韓文)、文化
財管理局文化財研究所遺跡調査研究室、
(1989)、73～127 頁、495～526 頁
- 31) 尹根一 : 全北益山郡王宮里遺跡発掘調査年
報(韓文)、益山文化、創刊号、(1990)、63
～86 頁
- 32) 陵寺(韓文)、国立扶餘博物館遺蹟調査報告
書第 8 冊、(2000)。20～52 頁
- 33) 金鍾萬 : 扶餘陵山里寺址についての小考(韓
文)、新羅文化、17・18、(2002)、55～72
頁
- 34) 竹島卓一 : 法隆寺金堂の諸問題、中央公論
美術出版、(1975)、139～188 頁